

学校訪問 鳥取県立倉吉東高等学校

所在地 鳥取県倉吉市下田中町 801 番地

訪問者 5名

訪問日 平成 28 年 11 月 7 日・8 日

対応者 校長・副校長・教務主任



1 学校概要

創立 107 年を迎える普通科高校。全日制・定時制を設置している。全日制は各学年 5 クラスで、全校生徒 592 名。(男子 288 名、女子 304 名) 県中部随一の進学校であり、倉吉市はじめ周辺町村から多くの生徒が通学している。

2 倉吉東高の「協同的な学び」「アクティブラーニング」

(1) 導入の経緯

平成 23 年度に「<興味なし・自信なし・将来展望なし>の生徒への」への問題意識を持ち始めた。勉強したがる生徒や自分の幸せだけを求めたがる生徒が増加傾向にあったため、生徒に学びに対する興味を引き起こし、主体的な学びへとつなげることを、さらには社会・貢献へ意識を向けさせることを目指す方向性を定めた。その後ビジョン委員会での検討を通じて一斉教え込み型授業の限界を認識し、協同的な学び・アクティブラーニングへと活路を求め、翌年度当初から導入に踏み切った。

(2) 倉吉東高の教育目標

主体的な学習者の育成
21 世紀をリードする人材の育成

(3) 「協同的な学び」・「アクティブラーニング」の定義

鳥取県では「新時代を開く学びの創造プロジェクト」として県内 10 校を指定し「協調学習(ジグソー法)」による授業改善を進めていたが、倉吉東高はその研究指定は受けていなかった。そこで、一つの学習形態にとらわれることなく、教員がいくつかの学習形態の中から教科の性格に合ったものを選択して授業において導入する、という形で進められている。

(4) 学校での取り組み

①校内モデル教科

- ・平成 24 年度より年度ごとに指定。
- ・指定科目については実践研究という形で他県の公立高校教員による示範授業・研究授業を行う。

②理論研修の実施

- ・現役高校教員等を招聘して研修を受ける。

③先進校視察

④授業改善・アクティブラーニングによる授業実践への全員での取り組み

- ・年度における「学校目標」を設定
- ・各教科で学校目標に沿った「教科目標」を設定
- ・個人はアクティブラーニング実践に関わる「個人目標を設定」

⑤目標達成のための指標作り…平成25年以後、年度ごとに制定。

- ・6月と11月に行われる授業評価アンケート
- ・校外模試での目標偏差値達成
- ・家庭学習時間3時間以上

などが挙げられている。

⑥65分授業の導入

- ・「アクティブラーニング」を効果的に進めるためには従来行ってきた45分授業では短い。

⑦土曜授業の導入

- ・毎月第2、第4土曜日を授業日とする。
- ・土曜授業日を含む2週間を1サイクルとする。

3 学校環境

- ・全教室にパソコンとプロジェクターを設置している。そのためチョークの粉による電子機器の故障を防ぐ目的もあり、全教室で黒板は使っておらず、ホワイトボードが用いられている。その上部には短焦点プロジェクターが設置されている。このプロジェクターは水平移動が可能であり、ホワイトボードの左右いずれの場所にも投影可能である。
- ・朝と帰りのSHRを廃止しており、連絡事項は教室及び廊下にあるホワイトボードや液晶ディスプレイに記されている。生徒は確認した上で自ら行動することが求められている。
- ・教務室に持ち運びできるホワイトボードなどは共用できるように取り揃えられている。

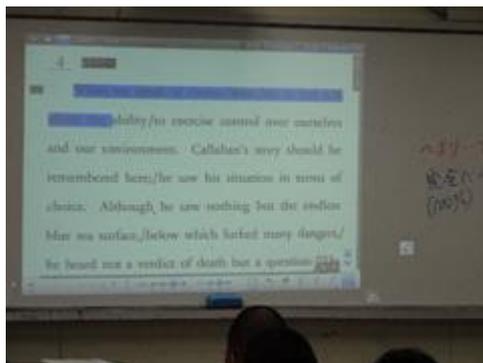
4 副校長・教務主任の話より

- ・活動班の作り方などアクティブラーニング（以下「AL」）と略称）への取り組み方を示した、「学習の手引き」を配付している。
- ・新転任教員に対してもALを導入した授業を進めていくという方針をオリエンテーションで伝えており、職員研修を通じて授業の形を確立している。
- ・以前は週末課題と週明けテストを行っていたがAL導入に際して廃止した。しかし小テストを行わないことで模試成績や家庭学習時間が低下してしまった。基礎・基本が身についた状態でのALを進めるべきか、基礎・基本をALを通じて定着させるべきか、と課題もある。昨年度卒業生は1年時に週明けテストで基礎固めをしたうえでALを行っていたことが国公立合格者の増加につながったのかもしれない。
- ・課題の量のバランスが教科間で調整されていないと生徒にとって過重な負担になってしまうため、課題の内容は教科に任せてあるが、毎週教科・学年主任会を行うことで確認を図っている。
- ・AL型授業の評価方法はまだこれといったものは定まっていない。定期考査に思考力・判断力・表

現力を問う問題を各教科で作成するなど試行錯誤の段階である。

- ・朝学習は行っているが、強制はしていない。あくまで生徒が各自で自らの課題に取り組むという形をとっている。
- ・進路については「志望を作る」という方針を取っている。力のある生徒に対しては「君は東大へ行くんだ」と早い段階から意識付けをさせる。
- ・難関大学の進学については県内の進学校(鳥取西・米子東)と連携・分担を図っている。

5 学校見学の感想



倉吉東高には「これがALだ」という画一化されたモデルがあるわけではなく、各教科の実情や特性に応じて様々な授業形態が進められていた。ペアワークや4～5人でのグループワークで答えを確認したり正答を導き出す授業もあれば、自分で考える時間が与えられる授業もあった。共通して言えることはこれらの授業は形式的に行われているわけではなく、生徒一人ひとりの取り組む姿勢が土台となっているように思える。

その土台を形成するためには、授業外にも様々な仕掛けが用意されている。後輩への指導を通して、自律性や責任感を培うチューター制度や、自ら予定を把握して行動する学校のシステムそのものも生徒個人の主体性形成に関わっていると考えられる。また他県の高校と提携して毎年開催している「国際高校生フォーラム」など自分の学びを外へ示していく機会を設けている。そして当然生徒が学びたい、学ばなければいけない、という意識を学校の雰囲気や職員が形成していることも看過できない。

学校の指導に従っていれば、とことん面倒を見て結果を出すという姿勢が教員側にあり、生徒はそれを信頼して学校を頼っているという印象を持った。地域の人口が10万人規模と、多治見市周辺の半分程度であるにもかかわらず倉吉東高・鳥取西高がそれぞれ現役・浪人あわせて200人以上の国公立大学合格者数を出していることがすごいことだと思う。しかしこれは本校でもその気でやればまだまだ生徒を伸ばせる可能性があることを意味しており、見習う点の多い学校であった。